

自然を収奪せず、人を搾取しない

(愛農講座講義 2002年8月13日)

村上真平

こんにちは、僕は、今年、20年ほど関わった海外協力の仕事を終え、日本に帰ってきて、福島県の飯舘村という所で、「共同体」への試みを始めました。今回は愛農会より、どうして、そのようなことを考えるようになったのか、どのような思いを持ってやっているのか、ということなどをお話するよにということでしたので、まだ始まったばかりの試みですが、お話をさせていただきます。初めに自分たちがやっている自然農業というものの説明から始めたいのですが、その序章として、自然と農業、自然と人間の在りようから話を進めたいと思います。

いま環境問題とか地球にやさしいということがいろいろ言われています。環境ビジネスということばもあるくらいに、これからのキーワードは環境、地球にやさしい、エコロジーということですね。そういうふうと言われて、環境意識が高まっているように見える今の時代ですけれども、ほんとうにぼくら人間が生きていくために必要な、人間が生きていけるような自然環境というものをこの地球上で維持していけるかという問題があると思うのです。そのことに関しては、ぼくがいま見ている感じでは、ほとんどそれは無理だなど思うんです。本来、環境というものはたとえば自分の生活、経済、身近な日々の行為そのものに、非常に密接につながってくるものです。しかし、環境ということばが叫ばれれば叫ばれるほど、環境というもの、自然というものが自分、人間からどんどん離れていく。なんか、自分はその一部分ではなくて、「自分は環境を守らなければ」という感覚になってくる。それは自分とは関係がないということにつながっていく。いま「環境」というものの考え方はひじょうに問題だなど感じています。ぼくらは「自然」ということばを安易に使っているけれども、でもほんとに「自然」って何かを理解していないんです。自然があり、その中の一部として自分たち人間がいる。そのところはいったいどういうことなのか。自然のあり方とはどういうもので、それを壊している人間の生き方とはどういうものなのかということが、根本的に分かっていない。その部分がわからないと、ぼくらは「自然」とか「環境」とかいろんなことばを、すばらしいことばを話しながら、本質的なことがぜんぜん見えてなく、理解していない。結果、自然を壊すことにつながるのです。

◆エコロジー

エコロジーということばは最近、最近といってもここ百年くらい前につくられたことばです。エコロジーということばは二つにわかれています、「エコ」と「ロジー」ですね。「エコ」というのは「オイコス」、「ロジー」は「ロゴス」です。「ロゴス」は「ことば」で

あり「学ぶ」、英語でいうとスタディー(study)という意味です。「オイコス」のもともとの意味は「家」です。英語ではハビタート(habitat)、そこに存在しているすべてのものという意味です。この「家」というのは人間をふくめて植物・動物、微生物そういったものすべてがある場所です。それらのあり方、関係性を学ぶこと、それがエコロジーです。だからそのエコロジーということばを見てくると、じつはぼくらが棲んでいる地球という「家」、家の中に存在している生物もあるし生物じゃないものもあるし、動物もあり植物もあり、微生物もあり、岩もあり、そういったものの関係性というものはどういうものを学ぶ、それがエコロジーのもとの意味になっています。ということは、ぼくらがエコロジーということを語るということは、自分たちが棲んでいる「場」というものはどういう関係性において成り立っているのか、それを知るということです。それを知ることから、自分たち人間がオイコス(家)のなかでどう在るべきなのかということに進んでいくものなのです。

◆植物

地球上で最初に生物として現われてくるのは微生物ですが、陸上にあがってくるのははじめに植物なんですね。植物から動物、そして微生物という関係を見ながら、自然の中にある関係性を簡単に見てみたいと思います。まず質問ですが、植物が生長するために何が必要ですか。何でもいいですから言ってください。(受講生)「光」。光というと太陽の光ですね。(受講生)「水」。そう「水」ですね。光と水、それから何ですか。(受講生)「空気」。そう、空気では知られていることは、二酸化炭素を吸って酸素を出すということですね。光・水・空気、基本的にはこれがあればいいのですが、生長をちゃんとするためにはもう少し必要ですね。それは何ですか。(受講生)「土」。「土」のなかの何ですか。これは愛農高校の専攻科生に聞こうか。(専攻科生)「養分」。そう養分が必要ですね。養分というのはどういうものがありますか。(受講生)「窒素、リン酸、カリ」。農業やっていくという人であれば窒素・リン酸・カリの三要素を知ってますよね。それから何ががありますか。マグネシウム、カリウム、カルシウム、鉄、硫黄…というわけで元素をあげていくとだいたいあたる。窒素、リン酸、カリを主要要素といって、微量なものを微量要素といいます。これには定説がありません。十六種類という人もいるし、二十五種類という人もいます。しかし、微量要素がどこにどれだけ必要だというようなことを今の科学では解明できません。が、生長するのに必要なものは木が知っている、植物がよく知っているわけです。

◆食物連鎖(フードウェブ)

植物が生長していきますね、それでその上に、植物の上につかる生物がいますね。それは何ですか。のっかるというのは、この植物が生産するものを食べて生きるものという意味です。何でしょう。(受講生)「人」。そう、人です。それから、これを直接的に食

べるというものは何がありますか。(受講生)「鳥」。そう、鳥もそうですね。いわゆる動物というのは直接・間接的にならず植物のお世話になるわけですね。ライオンが「おれは植物を食べん」といっても、ライオンはシマウマを食べます。シマウマは植物を食べていますから、結果としてライオンは植物を食べているということになります。で、ふつうは自然界のなかの動物間の状況を表すために四つくらいにわけてつながりを見ようとします。たとえば植物を食べるのは虫。虫を食べるのはカエル。カエルを食べるのはヘビ。ヘビをワシが食べる。虫→カエル→ヘビ→ワシ、こういう関係性ですね。こういうのをぼくらは食物連鎖と呼んでいます。最近では連鎖というよりもフードウェブ(food web)と言っています。ウェブというのはクモの巣状のことで、様々な動物間の関係はクモの巣のような関係性がある。必ずしも一方向に回っていくのではなく、いろいろな食べる食べられるという関係があるということです。これをもう少し別なかたちで表すと、ピラミッド型になります。食べられるほうが多くて、食べるほうが少ない。当たり前ですね。もしカエルが毎日虫を十匹食べるとしたら、虫はカエルの十倍以上いなければ生き延びることができないわけですから、いちばん下に位置するものは非常に多くなり、上にいくほど数が少なくなっていく。自然においてはこういう関係性が必然的にできあがります。そして、ここにヒトが入っているわけです。

◆有機物とは

さて基本的に人間というものは動物のなかにいますよね。植物ではない。でも植物も動物も生物です。生物ということは、生命があるということですね。生命があるということは将来どうなりますか。そう、必ず死にます。ある哲学者が言っていることですが、世の中でいちばん不思議なのは、人間は自分が死ぬ存在であるということがわかっていないことだといえます。ぼくらは「死」ということばをいっぱい使っているけれども、死ぬまで自分には関係ないと思っている。ぼくらが「死」ということをどう受け止めるかというのは今回の話とは別のことになりますが、つまるところ、生命は死ぬ存在です。それで自然界にある生命が死ぬとどういうふうになるか。自然界にあるものは死んだところに落ちます。つまり土の上の上に落ちるわけです。人間も基本的に土に落ちる。この「土に落ちたもの」は生命があったものです。たとえば木の葉は落ちる。植物も最後には枯れて死ぬ。動物も死んだら落ちるし、糞をしたらそれも落ちる。そういうものを総称してどういうことばで表したらいいのでしょうか。死んでしまってどんどん形をとどめなくなってくると、もとはヘビであってもそれはヘビとは呼ばないですね。何かいいことばはありますか。(受講生)「有機物」。そう有機物ですね、科学的なことばで有機というのは炭素があるということですね。それはともかく、ぼくらは有機物とか有機農業とか「有機」ということばをいろんなところでよく使います。そういうときの有機物の考え方は、牛の糞だったりとか、ニワトリの糞と思われたりしますが、有機物の定義はもと生命があったものです。生命が排泄したものであったり、もと生命だったもの。ですから、動物の死体も、牛の糞も、

人間の排泄物も、枯れ枝も、落ち葉も、ぜんぶ有機物なわけです。

◆土の上に落ちる

基本的に自然界のなかで有機物は土の上に落ちます。で、落ちた有機物は時とともに分解し、その形をとどめなくなりますね。では、有機物がもとの形をとどめなくなったという状況を何というでしょう。たとえば雑木林の中にいけば、いっぱい葉っぱとか、ウサギの糞とか、虫の死骸とかがあります。上から葉っぱを一枚ずつはがしていくと、葉のかたちがだんだん崩れていくようになり、さらに下にいくともう葉っぱじゃなくなっていく。それを何といいますか。（受講生）「腐葉土」。そう腐葉土といいますね。腐葉土ということばは実は正確なことばじゃないくて、正確には腐植といいます。英語ではヒューマス（humus）です。その腐植を多く含んでいる土を腐葉土といいます。それをもっと詳しく見ていくと、その腐植もその状態では長くとどまりません。分解され続けていくと最終的にはどういうふうになりますか。（受講生）「無機物」。そうですね。その最後には無機物（ミネラル）になります。土からでてきた植物、動物は、死んで腐植になり、最終的には分解されて無機物に戻っていく。この有機物から腐植にいて、腐植から無機物に分解していく役目をはたしている生物がいるのですが、その生物の名前は。（受講生）「微生物」。そう、微生物ですね。この関係を簡単に説明しますと、地球上に存在する動物、植物、微生物というものは基本的にこういう循環の関係をもっています。じつは、これはぼくら小学校か中学校くらいで習っているんですね。ところが、ほとんど自分たちは習っていても頭の中に残っていないんですね。ぼくはある時に思ったのですが、この関係性がほんとに理解できたら、今の農業の問題、化学肥料や農薬がどういう問題性を持っているのかということや、なぜ病害虫が発生するのか、そして、さまざまな環境問題がなぜ起こるのかという本質がハッキリと見えます。ここから学べることが無数にあるんです。

◆自然のもっているバランス

この黒板に描かれた自然の中における「植物」「動物」「微生物」の関係の図を良く見てください。そして、自分が受けた感想を話してみてください。（受講生）「循環というものは、途中が切れてしまうと続かなくなってしまう」。そうですね、この関係性をよくみるとこれは円ですね、全てがつながって成立する循環です。この関係性が永続していくためには、途切れてはいけないということです。ある部分が欠落すると永続できないわけです。どこかの部分を別のところにもっていってしまうと、循環の輪が崩れてしまうのです。（受講生）「感想ですか？自然はえらいなあ」（笑）。自然というものはもともと人間を含んでいるんですね、本来は。でも自然はえらいなあ、という感想は、生命というものを育て、ぼくらも食わせてもらっているという意味で、たしかにえらいですね。そのほかにありませんか。（受講生）「人間がある一定の数より増えたら食物連鎖が成り立たない」。食物連鎖のピラミッドというのは、下が広がって上にいくと小さくなっていくので

すが、いちばん下に植物があって、その上に動物の世界が成り立っているわけです。つまり、全ての動物を支えるだけの植物が無ければこのピラミッドは成り立ちません。つまり、植物というすそ野が広ければ、高い動物のピラミッドがたち、狭ければ低いピラミッドになります。これは非常に単純なことです。ぼくはバングラディッシュにいたのですが、バングラディッシュというところはベンガル虎で有名なところで、昔は虎がたくさんいたんです。でも、今は限られた地域にほんの少ししかいません。何故か。すそ野である森が少なくなり、ピラミッドの頂点にたつ虎は存在できなくなってしまったということです。これは非常に単純なことです。この関係性というのは自然がもっているひとつのバランスなんですね。ですからいま言われたように、人間だけが増え続ければ、当然のごとく人間が消費するものによって下にあるものが大きな影響を受けます。いま科学の力を使って人間は自分の欲望を広げようとするわけですから、そのしわ寄せは最後にすそ野である森林にに來るわけです。森林破壊にはそのような本質があります。

◆助け合う関係

(受講生)「みんな循環していると思うのですが、太陽だけは与えてくれるばかりだなと」。そうですね。植物、動物、微生物は地球の中にあり、太陽はその外ですね。で、これをよく見るとですね、地球上にある生命というものは、太陽エネルギーが植物によって生命が使えるかたちになり、その変わったもの(炭水化物)の上に乗っかっている構図になります。つまり、生命の元は太陽エネルギーです。ところで、生物である食部t、動物、微生物の関係をもう少し見てみましょう。全ての生物は植物が太陽エネルギーを炭水化物という食べ物に依存しています。特に動物は植物の上に乗っかっているだけのように見えるんですが、同時に動物は植物を助けていることにもなっています。つまり、動物は植物の種をほかの場所に移動し広げる役目をしているのです。植物というものは自分の子孫を拡げていくために種をいろいろなやり方で広げようとします。たとえば、秋に草原などを歩くと服にいろいろくっつくものがあるでしょう。あれはあの植物の知恵です。そうやって動物に自分の種をくっつけて別なところにもって行って種をまく。風で飛ばされるものもあるし、鳥に持って行ってもらうものもある。美味しい果実を作って動物に持って行ってもらうともします。そんなわけで、動物というものは植物に依存しているんですが、同時に植物をひろげていくという役目もしているわけです。もうひとつは動物を通ってくる有機物というものです。動物の生体を通ると、窒素・リン酸・カリ分などが、食物となった植物に比べてかなり多くなります。これは不思議なことです。つまり動物はその植物から与えられたものとは別のものをどこからか受けていることになります。これは今の科学では証明されませんが、事実として、動物を通ってくる有機物は植物そのものが持っている栄養素とはちがうかたちで、別の栄養素を付け加えています。そういうわけで、動物は植物にまったくべったり依存というだけでなく、植物を助けてもいるわけです。

◆土

五億年前ごろの地球上では、水の中に生命が生まれていますが地上には土がありません。土は僕たちの目の前にあるから、当たり前にあるように思っていますが、じつは土そのものは、地球上の生命の活動がなければ存在していないものなのです。もしタイムマシンがあって四億年、五億年前の地球に行けるとします、そしたら、そこには水と岩石、岩石の粉はあっても、土はありません。生命の無い荒涼とした風景があるだけでしょう。土ができるためには生命である、植物、動物、微生物の循環が作りあげる腐植が必要なのです。この腐植が岩石の粉（ミネラル）と混ざることによって始めて土ができるのです。ですから、土というものは常に供給される有機物（腐植）によって作られ続けることによって存在しているわけです。このことを本当に理解しますと、「化学肥料を使うとなぜ土が固くなるのか」ということが理解できます。土というものは植物、動物によって生産された有機物が、微生物によって分解され、腐植になり、その腐植がミネラルをつなぎ合わせて団粒構造を作り、その構造によって水分と空気が十分に含まれるようになり、軟らかい土になるわけです。その有機物の供給が無くなれば、腐植も時間と共に分解されミネラル化します。腐植が少なくなってくると土は団粒構造が崩れて堅くなっていくわけです。有機物の供給が一切絶たれますと、最終的にはもとの岩石の粉にもどってしまうわけです。ですから「なぜ土を良くするためには有機物が必要なのか」という質問は本来質問になり得ないのです。土の本質を理解するならば、有機物が供給されない限り「土作り」は本来あり得ないわけです。

◆生命体ー地球

このように見てくると、太陽が与えているエネルギーというものを地球上の植物がまず、生物が利用できるかたちに蓄積し、それを動物、微生物が利用して行く循環の中で、様々な生命が生存できる今の自然環境と気候というものを気が遠くなるような長い時をかけて、造ってきたのだということが分かるようになります。そして、それは今も作り続けられているのです。この地球の在り様を表す言葉として「ガイア」ということばを聞かれたかたがあると思います。これは簡単にいうと地球は生命体であるということです。ガイア思想というのが出てくる前は70年代の頃、地球の在り方を表すことばとして「宇宙船地球号」と呼びかたがありました。宇宙に浮かぶ、限られた資源に依存する機械的な仕掛けである宇宙船、地球という意味です。ところが、地球のことを調べて行くうちに、生物が棲むことができる空気中の成分であるとか、気候、自然環境といったものが、すべて生命の活動によって生み出されて、コントロールされている、という事実気づくようになってきました。そして、それらが壊れそうになると生命自身ももとの戻していこうとする働きがあるということが分かってきたのです。そこから、地球そのものが実は一つの生命体なのではないかという考え方がでてきたわけです。それが「ガイア」という思想なのです。つまり、地球という生命体が太陽のエネルギーを受けて、生きているということです。地

球が生きているということは、地球という生命体の中にある構成部分である生物が非生物との関係の中で、生命が棲める環境をつくっているということです。そして、これが自然というものの本質であるということです。

◆自然と反自然（人工）＝農業

自然とは生命を生かし育むとするならば、生命を脅かし破壊する、自然の反対、反自然をあらわすことばは何でしょうか…。人工ですね。「人工」というのは人の行為です、人間がやることです。ところが、人間は反自然的な存在でありながら、自然に存在を支えられている自然の一部であるという事実があります。つまり、人間は自然がつくる生命を育む環境（空気、水、食べ物など）なしに存在することはできないのです。その限りにおいて、自然の一部であります。しかし、その一部であるに関わらず自然を壊す存在であるということです。この矛盾した関係がどうしてできたのか？そこのところを少し見て行きたいと思います。

人間の歴史というのを見ると人間は二百万年から四百万年ぐらい前に誕生したといわれます。そして、一万年くらい前に農業が始まったといわれています。そうしますと、たとえば二百万年前に人間が生まれたとしても誕生から百九十九万年間は、人間というものは自然の中の一部として生きてきたわけです。ですから人間は動物に襲われたり、食べるものがなくなってきたりすると移動するという、狩猟と採取を中心とした生活をしていました。そういうことを百九十九万年間してきたわけです。この間の人間の行為は自然を大々的に破壊することが殆どありませんでした。つまり、自然が与える動物とか植物に頼って生きており、その一部であったために、人間の生きる行為が「人工＝反自然」にならなかったわけです。それが一万年ごろから自分たちが食べる植物だけを栽培することや、食べる動物を飼うという方法を発見し、広がってきました。それが農業（農牧）の始まりです。この農業が広がることによって、人間が自然に対して大々的な干渉をするということが始まりました。森を切って、焼いて田、畑を作ったり、川の流れを変えて水路、灌漑施設を作ったりというようなことです。この農業の発展によって人間は自然を人間の都合に合わせて作り変え、人間の人口が飛躍的に増えるという発展をしてきました。しかし、同時に「人工＝反自然」的なことを恒常的にするようになってきたわけです。つまり、農業の始まりによって、人間の行為＝人工＝自然破壊、という図式ができあがってきたわけです。農業はその生まれからして反自然的であるという特性（原罪）を帯びているのです。

◆思考する動物「人間」

ここで質問ですが、人間と自然の違いはどういうものがあるのでしょうか。
<受講生>「自然には無駄がなく、人間の社会には無駄がある」。無駄、ですか。<受講生>「人間の社会には循環がない」。循環していない…人間というものは非循環なのではないでしょうか？ほんとにそうなのでしょう。そのほかにありますか。<受講生>「意志、と

どうか考えというか、思いというか、そういうものが人間にはあるけれども、自然にはない」。ぼくらは、植物や動物にはそういうものがないと信じていますよね。少なくとも人間と同じようにはしていないことは確かですから、その点では違いがあるわけですが、はたして意志がないかどうかという問題はまだわからないですよね。ただ人間がおこなっているような行動はしないということで違いはあります。人間が動物や植物をふくめた自然と違うのはその部分ですね。考えるということ「思考」と呼ばれるもの。これは人間と自然の本質的に違うところです。そして、人間は考える「思考」の働きによって、自然の働きと根本的にちがう行為をするようになったわけです。農業を発見したのは人間が思考する存在であったからです。

◆「強者」＝「弱者」？

ここでもう少し考えてみたいのは、自然が持とうとする関係性のありかたと、思考する人間が持とうとする関係性のありかたの根本的な違いはなにかということです。＜受講生＞「自然は競争してなくて、人間は競争している」。…競争ですか。「自然は共存していて、人間は競争している」。競争原理というものが、ひとつの自然の形態だと言い出したのはダーウィンですね。ダーウィンが進化論のなかで、生物は無生物みたいなものからどんどん進化してきて今のようになっているのだから、「強いものが勝ち残る」（適者生存）といったわけです。ダーウィンの考え方、強い者が勝つのだという考え方は、一九世紀以降、西洋諸国による植民地支配を正当化する論拠になり、現代の基本的な思想として受け入れられていて「常識」のように見えます。ダーウィンは自然の在り方を見てそう言ったわけです。ところがいま受講生は、自然を見て共存といいました。それは自然を見る視点が根本的に違うということです。ある部分だけを切り離して見ると、弱肉強食のように見えるライオンとシマウマの関係も、ライオンがシマウマなど捕食する動物をぜんぶ食べてしまって完全に「勝った」としたら、ライオンはじつは「負けて」滅んでしまわなければなりません。一見、強い者が勝っているように見えるけれども、強い者はつねに少数でありじつは弱いという自然の鉄則があります。そして、現実はいちばん初めに食べられる「弱い」虫のほうがよっぽど強いのです。人間はいくらがんばって子どもを産もうと思っても双子くらいだし、一年に一回。それに子どもを産むまでに十五年とか二十年かかってしまう。ところがある虫は生まれて一ヶ月で卵を産むようになり、しかも百個くらい産む、そのスピードというものは人間やその虫を捕食している動物の比ではないわけです。そうすると「強い」「弱い」という判断は何処でつけるのでしょうか。

◆循環＝生命活動

少なくともいま言われたように、自然の中の植物、動物、微生物の関係性、つまり循環している関係性が分かってくると、先ほど共存と言われましたけれども、それぞれの生命が生存するためには、他の生命活動がなければ生存できないということに気づきます。そ

れは、生命は支えられることによって存在しているということに気づかされるということです。そして、直接的な関係がなくても間接的には全ての生命と関係しているという事実を知ることなのです。この循環の関係性の中では「弱いもの」「強いもの」、「有用なもの」「不要なもの」、といった区別は消滅してしまいます。なぜなら、循環が存在するためには、その輪の中にある全てが必要だからです。全てがその存在の意味と機能を持っており、それがゆえに循環が在るのです。そして、循環が壊れるということは、その中にある生命活動も終わるということなのです。

◆分ける人間、分けない自然

人間の関係性のもちかたは、ほとんどの人がそうですけど、基本的に自分の好みで判断します。自分にとって都合がよければ受け入れて、よくなければ排除する。好きか嫌いか、必要か必要でないか、かならずぼくらは分けて考えます。思考して判断しているのですが。そして、自分にとって都合が良く、好きなものは手に入れようとし、執着します。一方、不必要なものであるとか、問題だと思われるものは排除し、できれば消し去りたいと思います。これが人間の基本的な行動のパターンで、ほとんど無意識的に行動をしています。分けるんです。良い、悪いを判断して分けて、良いものは自分の手元に置いて、悪いものはぜんぶ消してしまいたいと思い、そう行動するわけです。従って、人間の無意識の行動は必然的に「必要なもの」と「不必要なもの」をつくることになります。

自然はものを、必要なもの、不必要なもの、大切なもの、無駄なもの、というふうに分けません。自然の中に存在するという事は、すべてのものにその存在の意味があるということです。そしてそれらは単独では絶対に存在しないのです。全てのものは支え、支えられるという関係性の中でしか存在していません。自然は分けないのです。あるがままを受け入れます。別な言い方をすれば、自然の中に在るものはすべてが必用なものであるということです。自然の関係性の取り方は、分け隔てをせず、優劣の価値判断をせず、すべてを受け入れて、すべてがその中で生かされていくということなのです。

◆自然農業へ

ぼくはこの事実の一つ一つ気づかされることによって、なぜ、人間が自然の一部であるのに自然を破壊して止まない存在であるのかという根本的疑問が、少しずつ解けてくるようになってきました。それと同時に、自然を破壊するという基本的性質を持った農業が、どの様にしたら自然を破壊せずに、自然の法則に乗っ取ったかたちで、しかも、人間に必要な食物は十分に生産できるのだろうかという、自然農業の方向性を考えるようになってきたわけです。

◆化学肥料の原理

ここで、人間の「思考」を基に発展してきた近代農業に関して少し見てみたいと思いま

す。思考の基とは「好き、嫌い」「必要、不要」「善、悪」というふうに分け、取捨選択をする考え方です。

まず、植物が大きく育つためには何が必要なのかということを見つけようとしてきました。そこで、植物を土から引き抜いて灰にし、科学分析をしました。すると植物の中には窒素・リン酸・カリが他の要素より多く含まれていることが分かります。次に、その窒素・リン酸・カリを今度は鉢植えにした植物に与えて生育の違いを比べる実験をしました。すると窒素、リン酸、カリの3要素を入れた植物がそれらを入れない植物より明らかに大きくなるという現象を観察することができます。そこで、植物の主要な養分はこの3要素であり、収量を多くするためには、これらを多く施せばいいと結論づけたわけです。そこで、窒素・リン酸・カリを肥料として大量に作る事ができれば、作物の収量は飛躍的に伸びると考え、化学肥料工場がつくられ、現在のように肥料といえば化学肥料というものになったわけです。

そして、工場で人工的に作った化学肥料を、「ここ」に入れるわけです。ここというのは、自然の循環の中で、植物や動物からでた有機物が微生物によって分解されて、腐植になり、更にミネラルになることによって植物に吸収されるという過程です。そして、その行為は自然の循環の有機物→微生物→植物というつながりを切るということです。つまり、土の中で起こっていること、有機物が微生物によって分解されてミネラルになる過程をいらないと考えたのです。なぜなら、人間にとって欲しいものは農作物を大きく成長させることに必要なミネラルであり、その中でも主なものは窒素・リン酸・カリなのだから、これらを化学肥料で植物に与えればいいのだろうと考えたのです。これが現在の近代農業です。そして、ほとんどの人が信じていることです。

◆近代農業が抱える必然的問題

ところが、この考えで農業をして行きますと必然的に、動植物から有機物が土に返ってくる関係性が切られますから、土のなかの有機物が減ってきます。有機物が少なくなると微生物の活動が衰える、腐葉土（腐植）がなくなってくる。そうすると何が起こるか。土が固くなります。それまで有機物から供給されていた様々な微量元素も供給されなくなり、微量元素欠乏症がおこります。微生物の食べ物（有機物）がなくなるために、微生物の活動が弱くなり、バランスが崩れて、病原菌が広がりやすい土壌環境を作ります。そのために作物が病気になりやすくなります。土が持っている養分を保持する力が腐植の減少と共に低下し、年々肥料を多く入れても収量が減ってきます。その他にも土壌が酸性化することなど様々な問題が次から次ぎへと出てきます。これらは、循環の関係性を切ったために起こってくる「あたり前」のことなのです。

ぼくらが、ほんとに自然というものを理解するならば、特に自然の循環と土の関係に関

して、土そのものは有機物が分解されて腐植になり、それが岩石の粉と混ざることによってできているものであるということ、有機物は循環の中で常に与えられていること、土は常に作られていること、有機物が与えられなくなったら土は土でなくなってしまうことが、理解できるようになるのです。このことを深く知ったならば、有機物の循環を切って化学肥料で間に合わせるといような考え方はでてこないはずですが。でも、現実には、今の農業の九九%はこれです。化学肥料がなければ作物は育たないと信じています。東南アジア、アフリカなどで農民に「農薬・化学肥料なしに農業はやれるんだよ」という話をすると、みんな目の玉まるくしてこういふのです。「化学肥料をやらないでどうやって成長するんですか」「農薬をやらないでどうやって虫をコントロールするんですか」と。そういう時は、ぼくも目をまるくしてこう聴きます。「あなたのお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんは、長いあいだ作物をどうやって育ててきたのですか。昔はだれも化学肥料を使っていなかったんですよね。もし、化学肥料がなければ作物ができなくて、生きられないと言うならば、どうしてあなたがたはここに生きているのですか」と。南の国々で化学肥料が使われだしたのは長くみてもこの二、三十年、どんなに多く見ても五十年程の歴史でしかないのです。

こうして見てみますと、ぼくら人間というものの常識はいかに狭く、近視眼的であるかということを感じさせられます。全体を見ずに、分け、ある部分だけを自分の都合で「これは良い、悪い」と決めつける。自分にとって必要と思われるものには執着し、不必要と思われるものを排除しようとする。そして、その浅薄な全体性を欠いた考えによる行動であるために必然的に問題が起こり、それに苦しめられているのです。

◆「先進国」アメリカの分別と排除

昨年9月11日アメリカで世界貿易センターがアタックされ、「テロリズム」の問題が非常にクローズアップされました。ブッシュ大統領は何も悪い事をしていない正義の国アメリカが卑劣なテロによって攻撃されたと言い、テロ撲滅のための正義の戦いとしてアフガン空爆を正当化しました。そして、今はイラクが標的です。まさに、自分たちに都合の悪いものは力によって排除、抹殺するという考えそのものです。日本政府はその行動をいち早く支持し、世論もマスコミもアメリカの行動と考えに同調的です。しかし、長い間、発展途上国と呼ばれる南の国々に住み、彼らの置かれている状況が分かってきますと、この「テロリズム」の背景が全く別なものに見えてきます。一言でいうならば、9・11事件はアメリカが中心になって作っている世界経済システムが引き起こした問題です。このグローバルイゼーションと呼ばれるルールは「先進国」に露骨に有利に作られている、合法的な搾取のシステムとしかいいようがありません。それによって苦しめられている南の国の人たちの悲しみと怒りは、非常に根深いものがあります。その意味で、9・11事件の原因は、他ならぬアメリカ自身です。自分たちがやったことのツケにアメリカ自身が苦

しんでいるのです。そして、その原因を見極めずに、自分の都合だけを優先しようとしている「テロ撲滅」の行動は、その問題をより深く大きくするだけなのです。ここにも、「分けて」自分の都合によって、善悪を決め行動し、その結果、新たな問題を引き起こすことを見て取れます。

◆悪循環

人間は「分別し、善悪を決める」その行動によって、自然の循環を壊すのですが、それでも自然はつねに循環しているために、人間が自然の循環を壊す行動をする時、結果として、その場所から悪循環というものが必ずおこります。たとえば、作物に窒素・リン酸・カリばかり与えると、これは、人間でいえば、子供に牛乳や肉ばかり食べさせるようなものですから、体ばかり大きな肥満体になります。当然、病気になりやすく、虫がつきやすくなるので、農薬を使って、駆除しようとしています。しかし、農薬をかけ続けると「害虫」だけでなく、食物連鎖の上部にあたる、「害虫」を食べて生きている生物まで駆除することになるので、「天敵」がいなくなってしまう。そうするとその環境が結果として、その「害虫」ばかりが出やすくなる状況になってゆきます。

その上、土のなかの有機物がなくなっていくから土は固くなり、微量元素もなくなってしまう。そこで、農学者は窒素・リン酸・カリだけでなく、微量元素もあげましようという。そうすると農民は仕方がないので、農薬や微量元素化学肥料を買ってきて使わなければならないようになります。最初は一袋でよかったものが二袋、三袋になり、五種類、六種類となっていきます。しかし、すればするほど、問題は深く、大きくなってゆきます。そこで、考えるのです「なぜ解決せず、問題が大きくなるのか？」と…。

自然の循環のルールを見ると、この悪循環というものは自然の循環を人間の都合で切ったところに起こる「必然」であるということが見えてきます。自然を分別し、敵に見えるもの（特定の虫、微生物）を悪いものと決め、それらを排除（駆除）するという方向に解決がないということが分かってきます。排除の方向は問題をより複雑に深く、大きくするだけなのです。その問題の本質を見るためには、今日、学んでいる地球上の生命が、太陽エネルギーを植物を通して受けるところから始まる自然の循環、これは生命の循環ともいえるものですが、それがどの様なものであるのかということ深く理解し、全体性が見えてくる時、問題の本質も自ずと見えてくるものだと思います。このことに関しては今日ぼくがみなさんに話したのはほんの数例なのですが、まだまだ多くのことがあります。みなさんがそれぞれの経験をこの自然（生命）の循環の在り様というものに照らし合わせて見てくると、多くのことが見えてくると思います。

◆自然農業の三つの原則

ここで自然農業について話して行きたいと思います。昨日もスライドを通してお話ししましたが、僕が自然農業というとき、それは三つの原則を持つものと考えています。第一に「循環」、第二が「多様性」、第三が「多層性」です。これらは自然、特に自然林の在りようから学ばされたことです。農耕が始まる前、農地は森林でした。自然の生命が一番豊かに生きられるところだったのです。そして、その自然の森林は「循環」であり、「多様」であり、「多層」な構造をもっていました。だからこそ、土は疲弊することなく、年々豊かになり、特定の虫や、微生物が大発生することなく安定し、太陽エネルギーと雨水とを最大限に利用でき気候の変動にも左右されないために、多くの生産性を持っていたわけです。

ところが、農業が始まったとき、人間にとって、有用に見えるものだけを植えることによって、多様性から単一性に向かい、収穫したものを田畑から持ち出すことによって循環を切り、単一なものを植えることによって多層から平面構造にしていったのです。自然農業とはその農業によって失われた「循環」「多様性」「多層構造」を取り戻す作業であり、それによって、本当の意味での土の豊かさ、安定性、生産性を取り戻す作業でもあります。

◆自分たちが「出すもの」を循環させる

今まで見てきて、何度もいっていますが、まずは自然は循環しています。生命は循環を止めたとき死にます。その意味で、循環を断ち切る唯一の動物、人間がすべきことは、身近なところから循環を考えて行動することです。まず一番身近なものは人間が「出すもの」です。毎日出すものをどの様に循環させるのかを考えることが大切です。現在ぼくらは水洗便所に行って流して、自分ところは綺麗にして、後は清掃局の仕事です。その清掃局はそれを浄化して、自然に帰す役割をすべきなのですが、実際のところは十分に浄化せずに川に流して、水質汚染という環境問題を作ったり、燃やしたりして循環を切ります。甚だしい話で、実際にあったこととして、大量の大小便を船で運んで、南の海に捨てるということもありました。現在、人間の出す大小便は環境汚染の元であり、その問題は遠くの見えないところに押しやれば事足りるということをしています。昔の人は肥溜めを作りそれを十分に発酵させてから畑に返したり、堆肥を作っていました。江戸時代には江戸の町民の大小便は全て、近郊の農家の貴重な肥料であり、全て田畑に返っていて、環境汚染が在りませんでした。

この自分たちの大小便の処理の仕方から、ぼくらの循環的な生活と農が始まると思います。やり方としては水洗便所で流さないでコンポスト・トイレを作って、堆肥化するとか、昔の肥溜めを作るとか、バイオガス装置に入れてガスと肥料にするとか、土壌浄化法などのようなもので浄化循環させることなどをして田畑に返して行くのが基本でしょう。この大小便は、循環させることができれば土、自然を豊かにするものであり、循環させること

ができないと環境汚染を起こすものです。その意味で、非常に身近で大切なものです。ふだん台所から出る残飯を堆肥化して土にもどすというのも、自分たちができるささやかな循環です。

◆農園における循環の基本

田畑においてはまず、そこでできた作物の食べない部分、ワラとか、幹、葉などは、なるべく育った場所に返します。「雑草」と呼ばれる草も作物の生育を妨げるようであれば、刈ってその場に返します。なるべく持ち出さないことが第一原則です。これによって、その場での植物の循環を促し、その土地から持ち去られる養分（有機物）を最小限にします。それでも、農業をするということは収穫をすることによってかなり持ち出します。一カ所から持ち出すその量は狩猟採取の比ではありません。その意味で、農業は土地からの「収奪」であります。

その収奪をなるべく軽減し、持続的な農が営めるようにするために、昔の農民たちは、堆肥作り、里山利用をしてきたわけです。その基本に習い、農園内においては、畦草や土手の草を刈って田畑に運んでしき草にします。畦や、土手は草が生えてそこに返って行きますと、土が肥えてきて土手崩れの原因になります。その意味で、その草を利用して田畑に入れることは運び去られた分をいくらか補うと共に、農園の保持管理も一緒にします。また、農園内で飼っている家畜の尿尿を堆肥化して田畑に返すことによって農園内循環をするのも一つの方法です。

その場合、家畜の飼料は基本的にその農園でできたものだけでまかなうことができれば理想です。が、畜産も生計を立てるためにする場合は、売る必要があり飼料を購入せざるを得ない場合もあります。その時は、なるべくその地域のものを使うことが大切です。そして、余分な尿尿は地場循環させるようにします。外部から大量の堆肥を持ち込むことは、かなり土地が収奪されているときにカンフル剤的にする以外に恒常的にすることは止めるべきです。また、大規模で家畜を飼ってその尿尿を大量に田畑に返すことも過剰な持ち込みになります。大量の家畜堆肥の持ち込みは土のバランスを崩す原因になります。土のバランスが崩れると化学肥料を使うときに出る病虫害の問題、作物内に亜硝酸が蓄積するといった問題が出ます。その意味で、何も持ち出さず、何も持ち込まない森林の状況を理想としつつ、土地の状況を見極めつつ、理想に近づいて行くのが自然農業の循環の基本です。

多様性

自然農業の基本の二番目は多様性です。熱帯の森に行きますと、この教室ぐらいの広さの場所に50種類以上の植物が生きています。1ヘクタールの土地ですと何百種類もの植物が在ります。それらの植物は、高い木、低い木、這うもの、巻き付くもの、乾いたとこ

ろを好むもの、湿ったところを好むもの、日の当たるところに生きているもの、日陰のところにいるものなどなど、実に多様です。自然の森の中ではその場その場に合った植物が森に降り注ぐ太陽の光と雨水を最大限に使えるようなかたちで生きている。この多様性というものが、自然の森に虫の問題や病気の問題がでない最大の理由なのです。

自然の森林はそこに生息する生物が全て生きられる環境なのですが、別な見方をすれば、一つのものだけが大量発生することができない環境であります。熱帯林などでは珍しい蝶を採集する人がいます。そういう人に聞くと蝶はある一定の地域に決まった数しか生育していないといいます。これは当たり前のように聞こえますが、よく考えると不思議なことです。蝶は一回に百個位の卵を産みます。そして、卵→幼虫→成虫→産卵というサイクルを一ヶ月から二ヶ月位でします。それを単純計算しますと、雄雌一つがいの蝶から百の卵が生まれ、それらが全部育つと雄と雌で五十匹ずつ。二ヶ月後、五十のつがいの蝶からそれぞれ百の卵が生まれると、二ヶ月ごとに五十の一乗、二乗、三乗という数になっていきます。つまり、半年後には十二万五千組のつがいが発生することになります。ところが、自然の森では、ある地域に十匹の蝶がいるとしますと、そこには毎年9～11匹の蝶がいるだけで、増えも減りもしないのです。

一つがいの蝶が生き延びるためには単純な話、次の世代に一つがいの蝶が残ればいいのであり、自然の森では結果としてそうなっているのです。そうすると残りの九十八匹はどこに行くのか。それら九十八匹はその成長過程で他の生物に捕食されていくわけです。農業における「害虫」とは、自然の中では草食性であり、食物連鎖の最初にいる虫のことです。食物連鎖の最初にいるということは、常に、他の動物に捕食されるところにいるということです。従って、自然の中で生き延びるためには天敵に食べられても生き残れる数が必要です。蝶などの繁殖能力の高さは、自然の中で種を残して行くために備えられた能力なのです。その繁殖能力の高さを持って、自然の中では、幼虫の段階で九五%以上が捕食され生き残れるのは5%以下です。成虫まで生き残れるのはそれからもっと少なくなります。

農薬を使っていた畑で農薬を使わなくなったら害虫だらけになってしまった、だから農薬を使わない作物栽培など考えられないという話を聞きます。つまり、「害虫」は自然に出るのだから、自然をコントロールしなければ農業ができないという考えです。しかし、それは少し考えたら不公平なものの見方です。いま見たように、自然の森では「害虫」の九五%は幼虫までにいなくなります。それが成虫になるとさらにいなくなって一匹くらいになってしまうわけです。ですから、自然の森においては虫による食害がほとんどない状態であり、あっても1%以下です。つまり、本来の自然においては「害虫」がいても大量発生することはありえないのです。この状態を九九%以上の食害発生阻止率があると呼ん

でみましょう。害虫問題の本質は農地にするときに自然の多様性を壊し、同時に、自然の森が持っている食害発生阻止率九十九%の機能を壊したために、ある特定の草食性の虫が大発生し、作物が多大な食害を被るということです。僕らはその特定の虫を害虫と呼び、「害虫」が発生するのは自然だから農薬などで殺さないで農業ができないといっているのです。

その過程をもう少し詳しく見てみましょう。まず、田畑などの農地を作るためには自然の森を伐採するということから始まります。僕らが目の前に見ているほとんどの農地はもと自然の森でした。この森を切ってしまうということはそれまであった多様な植物、動物、微生物がとりさられて、代わりに人間にとって都合の良いいくつかの作物に植え替えられるということです。つまり、植物の多様性の度合いが急激に下がるということです。自然の森の虫による食害発生阻止率99%は、多様な植物が、多様な動物（ここでは「害虫」の天敵）が棲める場を作っているために保たれています。植物の多様性が下がることによって、天敵の棲める場も減りますから、阻止率も当然のように下がります。タイなどで、森から畑にして単一の作物を植えた所を見ると、最初の三年くらいは農薬がほとんど要らないといえますから、虫による食害発生阻止率は九十%以上あるようです。しかし、五年程になると作物の食害が二十%くらいになり、農薬を使い始めます。農薬は基本的に毒ですから、食害を起こす虫もその虫を食べる天敵と呼ばれる虫も同じく殺してしまいますし、鳥などの天敵も寄り付かなくなります。その上、天敵は数が少なく、農薬に対する抵抗性も弱い為に、農薬を使えば使うほどに、天敵が少なくなって行きます。天敵が少なくなるに比例して、食害を起こす虫が多くなってゆきますからその農地の持つ食害阻止率が下がってゆきます。常に農薬を使っている農地では食害発生阻止率が一〇%もないところがあります。一〇%ないということは九〇%の作物が食害にあうということです。ですから、このような農地で農薬をやめたとき「害虫」の大発生によって畑の作物がだめになってしまうのは当たり前です。単一作、農薬散布という反自然な行為によって、自然のもつ特定の虫を大発生させない機能を壊しておいて、「やっぱり農薬つかわないとだめじゃないか」というのは、自分で作った問題を他人のせいに行っていることと同じことなのです。

作物の病気に関しても同じことがいえます。病気は土中の微生物のバランスが崩れることによって起こります。病原菌と呼ばれる微生物は自然に存在しています。そして、それは他の微生物との関係で、バランスが存在し、ある程度以上増えません。これは虫の関係と基本は同じです。ただ、微生物の方がより多様で、繊細で複雑です。この土中の微生物バランスを人為的に壊すとき、作物の病気が症状として現れます。従ってこの問題は、病原菌と呼ばれる微生物が悪いのではなく、その微生物を大発生させる状況を作ることが問題なのです。崩れる原因は現代の農業の在り方にあります。化学肥料によって、微生物の食べ物である有機物の量が激減しました。食べ物がなくなるのですから、微生物の数も少

なくなりますし、活力がなくなります。そのような状況では、得てして、病原菌と呼ばれる微生物が繁殖しやすくなります。また、土に帰る有機物の種類が限られているということも、そのバランスを崩します。有機農業といいながら、動物性堆肥に偏るとやはり、そこに、病原菌と呼ばれる微生物を繁殖させる状況を作ります。また、連作などによる根圏環境の単一化も特定の微生物を増やしてしまいます。そして、極めつけは農薬による土壌消毒です。これは微生物皆殺し作戦ですから、バランスを完全に壊すということです。バランスが壊されたときに最初に増えるのは殆ど病原菌と呼ばれる微生物になります。とにかく、商品作物の単作、連作、化学肥料、農薬多投という近代農業の在り方が病気の元を作り続けているのです。ですから病気を出さないようにするためには、まず、問題の元を絶たなければなりません。そして、土に還る有機物はなるべく多様にする必要があります。自然の森のように、多様な植物性の有機物が十分に還るようになると病気の問題がほとんどなくなります。

簡単に農業に起こる虫の食害、特定の微生物による病気の問題の原因を見てみました。そして、結論としていえることは、これらの問題を解決する鍵は多様性であるということです。本来自然は、害虫と呼ばれる虫や病原菌と呼ばれる微生物を問題が起こるレベルまで増殖させない機能を持っているのです。そして、その機能は多様性によって作られているのです。ですから、その多様性を農園でいかに実現して行くかということが農業の具体的技術になるべきなのです。では農地で実際にその多様性をどのように実現して行くか具体的に見てみようと思います。

多様性は植物の多様性からはじまります。簡単にいえば、農園内の農場、家畜小屋、敷地などあらゆるところを利用して、生活に必要な植物を植えるということです。まず、畑であれば、多様作や混作（コンパニオンプランツ）が基本になります。多様作とは農場内に10の畑があれば、全てを一つの作物だけにするのではなく10種類以上の作物を植えるということです。そして、1年ごとに植える作物を変える輪作が基本になります。混作（コンパニオン・プランツ）は一つの畑内に、なるべく多くの作物を植えることです。特に、作物の中には一緒に植えると相性の良いものがありますから、そのようなものを選んで植えると虫や病気の問題を避けることができたり、養分の奪い合いという競合関係をなくしたりということが出来ます。

トウモロコシなど稲科の作物と大豆などの豆科の混作は様々な国で伝統農法として確立しています。これは稲科のように養分を沢山必要とする作物が豆科のように養分を余り必要とせず、しかも、空中の窒素を固定する能力がある作物と一緒に植えられるために、稲科の作物にとっても益があるということです。その他に、キャベツ等のアブラナ科の作物とネギ類などの混作も良くされます。これはネギのにおいを蝶々が好まないということを利用して、バン格拉デシュの伝統的な混作の中には唐辛子とカボチャというものがある

りました。唐辛子の中にカボチャを植えると瓜羽虫がつかないといひます。

このように植物の間には相性がありますので、その辺を考えて、植えると非常に安定した環境を作り上げることができます。次に、畑だけでなく畑の土手や境界を使って、独特のにおいがあるハーブなどや、高木にならないベリー類、お茶などの植物を生け垣として植えると多様性と土地の利用率が向上します。これらの植物はそれそのものが持つ影響の他に、天敵である鳥や虫などが棲める環境を提供します。

農業をするという、どうしても植える作物が限定され、植えるところも田畑に限定されがちです。農業という枠に縛られがちです。しかし、多様性を考えるときには自由な発想が求められます。植える植物は作物だけでなく、果樹、用材樹木、ハーブ類、香辛料木、花々、竹など何でもいいのです。そして、植える場所も田畑の畦、土手、農具小屋や、家畜小屋の脇、瓜科などの蔓がある作物であれば、屋根の上などというふうに、考え方でいかようにも植える場所を見つけることができます。このような考え方のガイドになるものとしてはパーマカルチャーや立体農業など考え方が参考になると思います。とにかく、思いつく植物を農場のあらゆるところを利用して、植えるのが肝要です。このように考えながら植物を見るようになると、農業の固定観念から抜け出せ、楽しい発想ができるようになります。発想の多様性が実は農園内の多様性につながります。多様な発想とは柔軟性の現れであり、農業だけでなく生き方にも関係してくるものだと思います。

多層構造

自然農業の基本の三番目は「多層構造」です。これは聞きなれない言葉だと思います。自然の森は農地に比べるとバイオマス（生物生産量＝光合成によって生産される炭水化物の量とそれに依拠して生きる生物が生産する有機物の総量）が約2倍ほどあります。バイオマスは農業でいうならば、収穫物であり、同時に農地に帰る有機物のことです。従って、これが多ければ多いほど収穫物も土に還って土を豊かにする有機物も増えるわけです。このバイオマスが自然の森では農地より2倍以上という意味はどういうことでしょうか。このヒントが多層構造にあるわけです。

多層構造とは地面（土）を覆う構造が多層であるということです。つまり、自然の森においては土が幾層もの植物と有機物に覆われているということです。最初に落ち葉によって覆われます、その上を下草が覆い、その上に低木があり、さらにその上に中木があり、最後は高木によって覆われています。この植物と有機物による多層構造が自然の森の生産性を最大にする理由です。自然における生産性の違いは、太陽エネルギーと雨による水をいかに効率よく利用できるかどうかにかかっています。自然の森の多層構造は太陽エネルギーを最大限に使おうとして多様な植物が自然につくった構造です。最初に高木が太陽エネルギーを使い、少し弱められたエネルギーを中木が使い、さらに弱まったものを低木が使い、最後に下草です。太陽エネルギーは地面につくときに非常に弱く、土そのものを焼

けるような日差しで照らすことはありません。従って、自然の森ではどんなに晴れの日が続いても干害という問題は起こりません。自然の森が太陽エネルギーを使い切るからです。

雨は高い空から落ちてくることにより、非常に強い衝撃力を持ちます。その衝撃によって裸の土は砕かれ、流されるわけです。表土流出の最大の原因は雨の衝撃です。自然の森においてはまず、高木によって雨の衝撃が和らげられます。次に中木、低木、下草、そして、最後は落ち葉の層によってその衝撃は和らげられ、土にたどり着くときその雨の持っていた衝撃はほとんどゼロになります。そして、雨水は有機物の層と土の間隙にゆっくりと蓄えられるわけです。その蓄えられた水は森の植物に十分に活用され、そして、静かに地下水として蓄えられるわけです。

ところが農業においてはその地面を覆う構造が単層です。作物によって覆われるだけです。それも作物が育って最大になったときにしか土を覆いません。耕したときには土を覆うものは何ともありません。土が裸ですと、雨が続けば表土流出であり、晴れの日が続けば干害です。太陽エネルギーと雨水は利用されるとき生産性を上げるのですが、利用されないときは反対に害になるのです。このように見てみますと農地が自然の森に比べ、いかに不安定なものであり、エネルギーや水資源を無駄にしているものであるかが分ると思います。従って、農地をもっと安定性があり、自然の恵みを利用できる形態にできるかどうかは、多層構造をいかにして、農地の中で実現するかにかかってくると思います。

そのための第一歩として、まず、土を覆うということです。それもビニールではなく、草やワラ、作物の残骸物でいいですから、とにかく有機物と植物で土を覆い裸にしないことです。それによって、土が守られます。不耕起は土を覆うときに可能になります。そして、できるならば自分たちの畑のまわりには樹木を植えたいですね。それは果樹、用木類何でもいいです。そして木の下には、陰でも育つ作物を植えます。日本ではあまり種類はないですけど、たとえば、ミョウガとか、畑ワサビみたいなものを植えてあげると、木の陰に作物ができます。そして陰にならないところには、キャベツとかトウモロコシなど、日が当たらないとうまくできないものを植えます。農園を外から見たときに森のように見えて、中に入ったときに畑も水田も果樹もあるというのが一つの理想の形になるかと思えます。

自然農業をするときにその理想のモデルを自然の森にみて、その在り様から学ぶとき「循環」「多様性」「多層構造」がみえてきます。これらは一つの基本的見方です。それ以外に沢山の見方があるのですが、それは自分で実践して行くときに体得されるものです。自然農業とは自分の損得勘定という物差しを離れ、枠に縛られなくなったとき、自然が常に語りかけている声が聞こえ、それに沿って農に関わるということです。そして、自然は人間に余りあるほどのものを与えているということを知ることです。

昨日と今日、自然と人間、自然と農業の関係を見ながら、自然農業のあり方ということで話をしてきました。これからは皆さんの質問とか感想をまじえながら残りの時間を進めていきたいと思います。

一（受講生）「新しい共同体の在り方を考えておられるということが一番印象に残っているんですけど、昨日のお話しの中にもちょっと出ていたんですけども、人間と人間の関係を今までと、どういうふうに変えたいと考えておられるのか、お話ししていただきたいのですが」。

今回の話のタイトルは「海外からの気づき」ということです。サブタイトルが「海外から日本が見える」になっていますが、これは、僕自身がこの二十数年間、海外協力の現場に関わる中で経験し、実感したことを皆さんとシェアしたいという思いを表したものです。前半の自然農業に関しての話は、海外協力を通して南の国の農業、熱帯の自然と出会ったことによって学ばせられたことでした。

今の質問にありました新しい共同の在り方を考えたいということは、これも海外協力の活動をする中で見えてきた「近代化」のもたらす大きな矛盾をどう乗り越えてゆくべきかという問いの中で生まれた想いです。その問いとは、「人間が地球上で生きてゆくとき、生存の基盤である自然を汚さず、壊さず、生きるにはどうしたらいいのか。」ということと、「人間社会で生きてゆくとき、弱い立場に置かれている人々を蹴落とすことなく、搾取することなく、生きるにはどうしたらいいのか。」という二つのものです。人間と自然、人間と人間の関係の在り方はどのようなもので在るべきなのか、ということを探求してゆきたいということが新しい共同体のあり方という言葉となりました。

このことは、海外協力の現場を離れ日本で生きるという選択をした時に、僕の心を占めた想いです。この四月から福島の地で数人の仲間とその在り方について模索する試みを始めました。したがって、今の段階で具体的にどんな形が良いかということは、とても言えません。しかし、その基本的な考え方と、なぜそのようなことを考えるようになったのかということについて、少しお話したいと思います。

1982年、僕が二十三歳の時、初めて行った海外の国がインドでした。高校生のころから海外協力に関わりたと思っていましたので、まずは、発展途上国と呼ばれる南の国を見てみたいと思い、語学などの準備を二年間ほどして、旅立ちました。この旅ではインドとバングラディッシュに一年間滞在し、インド、バングラデシュの農村の状況というものを自分の目で見ることができ、同時に多くの新しい学びをさせられました。

その後日本に帰って福島で有機農業をしていたのですが、八十五年、シャプラニールという日本のNGOの要請を受けバングラデシュに駐在員として赴き、海外協力の現場に関わり始めました。シャプラニールで三年間活動した後、自然・有機農業を農民に勧めている

バングラデシュの NGO に三年間、自然農業のアドバイザーとして関わりました。合わせて六年間ほどバングラデシュに滞在し、九十一年に日本に帰りました。

日本では、福島の実家で自然農業をしていましたが、九五年から、JVC（日本国際ボランティアセンター）という日本の NGO の要請を受け、アドバイザーとして再び海外協力の現場に関わることになりました。最後の五年間は、タイの NGO の仲間たちと自然農業のトレーニングセンター作りをしていました。このトレーニングセンターも3年間でタイの人たちに責任を渡すことができ、自分の役目を一通り終え、2002年一月に日本に帰ってきました。気づいてみますと、これまでの二十数年間は海外協力活動に関わる日々であり、実際に海外に滞在していた期間が十二年間になっていました。そんなわけで、久しぶりに日本に帰ってきた今の僕の気持ちは童宮上から帰ってきた浦島太郎みたいなものです。

さて、二十数年の海外協力活動をとおして、感じたこと、学ばせられたことは非常に多くあり、一言ではとても言い表せないのですが、二十数年前、この活動に関わり始めたころに感じた思いと、今感じている思いでまったく一緒のことがあります。ある意味で、最初に感じたことを二十数年かって裏付けることでしかなかったことです。それは「世の中に必要なことにも事欠く貧しい人々がいるということは、もう一方に必要以上に多くを取って豊か過ぎる人々がいるからだ」ということです。貧しい国と豊かな国の関係もまったく一緒です。これはある意味で自然の法則であり、バランスであり、それ以外のものではないという事実を深く再認識させられたということです。

二十数年前に直感的にそう感じたのですが、それを認めたくないという思いもありました。それは自分が物質的に豊かな国に生まれているので、それは変えられるものではないという現実があるし、ただ豊かな国に生まれたというだけで、罪の意識に駆られるのがいやだったのだと思います。そして、「貧しい人々も頑張れば豊かになれ、世界中みな豊かになれる」という夢（幻想）を信じたかったのだと思います。しかし、豊かな国日本から貧しい国と呼ばれる国々に行って海外協力の活動をすればするほど、事実を知れば知るほど、結論はそれではないのです。幻想や思い込みで事象を見るのではなく、事実は事実として認め、その上で、どうするのかということしか何事においても解決に向かう道はないということを感じさせられたわけです。

そこで、「じゃあ自分は今からどう生きるのか」という問題にぶつかりました。僕は日本の NGO のスタッフとしてタイなどに行き活動をしている。国連や政府の援助機関のスタッフに比べたら少ないながらも、日本に積み立てできるくらいの経済的保障はされているし、現地での生活費にはぜんぜん困らない。それで自分のしたいと思う活動ができる。じゃあ、僕と関わるタイの友人たちやバングラの友人たちはどうか。彼らは自分たちの生活をかけて生き、同時に自分の国や社会のいろいろな問題を何とかしようとしている。それ

に比べると、なんか自分の関わりは中途半端という感じが否めない。自然農業の専門家としてタイの仲間たちとトレーニングセンターを立ち上げ、請われればいろいろな所で NGO のスタッフや農民にトレーニングをしている。バングラやタイの友人たちはそんな僕の行動を喜んでくれる。けど、自分としては自分の側はすごく守られていて、なんか好きなことを言っているだけ、みたいに感じるが多々ありました。自分の立場が中途半端で、意味がないことはないのだが、知ってしまった事実にたいして、自分の人生を掛けた行動をしているのではないと感じてしまったのです。

結局、海外協力というものをずっと考えてきて出た最後の結論は、「現在の経済システムを自明の前提とする、もしくはその経済システムを積極的に守ろうとする海外協力のあり方は、全く意味がない」ということです。それはどういうふうに意味がないのか。簡単にいうとそのシステムを維持することは地球の資源や環境負荷の観点から見て不可能であるということと、現在の経済システム、つまり、貧しい国と豊かな国があるこの世界の経済構造を前提としているシステムは、貧富の格差を少なくするどころか、増大させるきわめて不公平なシステムであるからです。地球の有限性と環境負荷に関しては多くの人々が語っていることであり、求めれば様々な資料がありますので詳しく述べません。ここでは世界をルールしている現在の経済システムがいかに公平さを欠くものであるかということをお話させていただきます。

このシステムは貧しい国は貧しいままにしておいて、豊かな国はそれを維持するという明確な目的の下に作られました。日本政府は自由貿易体制や国際秩序が大切で、そのなかで日本は「勝ち進む」とか「生き残る」ということを言っています。それは、世界のマーケットのあり方、つまり、流通システム、金融システムが公平であるという「常識」があるからです。つまり、このシステムは貧しい人々にも豊かな人々にも公平に機会を与えていると信じていて、公平な条件のもとでの競争していると思っているのです。でもそれは、単に、自分にとって都合がいいことを思い込み信じているのに過ぎないのです。実際は、きわめて不公平であり、信じ込まされているシステムそのものが、冷静になって考えれば、なぜこんなルールがまかり通るのかと首をかしげることばかりなのです。

ここで世界の経済システムの基本である貨幣の価値を決めるシステムを見てみたいと思います。これは毎日ニュースでやっている、円がドルに対して120円になったとか、ユーロが上がったとか、下がったという、変動相場制システムです。僕らはこれによって世界にある様々な国々の貨幣の価値は公平に保たれていると信じていると思います。このシステムを根本的問題のひとつの例に挙げてみたいと思います。

たとえば日本の若い人が海外旅行に行きたいなと思ったとします。じゃあタイに1ヶ月間くらい行こう、ということになったとします。タイに行くにはチケットが往復で五万〜七万円くらいです。タイで一ヵ月間、安宿に泊まりながら、あちこち旅をすれば十万円も

あれば十分です。そこで十五万の金を貯めようと思します。そうすると、学生のアルバイトでも時給七百円から八百円ぐらいにはなりますから一日で五～六千円、もったきつい土方のような仕事であれば一万円ぐらいになります。ですから、本気で15万をためようと思ったら一～2ヶ月間あれば充分です。そして、タイで一ヶ月間、遊んで来られます。タイにいるときはそんな日本やヨーロッパ、アメリカの若者をたくさん見ました。

そこで、仮にですね、一人の若者がタイに行つてすぐにお金もチケットもなくしてしまつたと想定します。そして、日本からお金を送ってもらわずにタイで働いてお金をためて日本に帰ろうとしたと、します。まず、帰りの航空チケットを買う必要があります。タイでもチケットの値段は日本と一緒にですから五～六万ぐらい必要になります。そこで、若者が日本でやったように、タイのコーヒーショップでウェイターとか、土方仕事を一生懸命やるとします。すると、彼は一日いくら得ることができるのでしょうか。タイではこのような仕事の場合、一日良くても百五十～二百バーツ。日本円にすると、一バーツ三円ですから、四百五十円から六百円です。でも同時に最低限でも生活する必要がありますから、その分を引くと、貯められるのは非常に少なくなつてしまいます。一日にせいぜい百円～二百円の余分を持てるかどうかでしょう。それで五万円までという、何日間かかるでしょうね。一年やっても難しいでしょう。

このことは、現実なのですが、よく考えてみると、同じ人間の、同じ労働が、国が違うことによって価値が違つてしまうのです。同じ人間が、同じごとをして、日本では1ヶ月間で貯めれるお金がタイでは1年間かかつても難しいのです。この事実が現在の公平だと言われている世界の貨幣の価値を決める金融システムです。

同じ人間が日本で働くと、タイの十倍の賃金もえ、日本からタイに行つて同じ仕事をするならば、十分の一の価値になってしまいます。中国に行けば二十分の一です。それを現在、先進国と呼ばれる国々が出資して作ったIMF（世界通貨基金）のルールによって守っているわけです。それが現在ニュースで見ている変動相場制というものを実現させている実態です。僕らは「円が上がつた」とか「下がつた」とか「ドルが上がつた」「下がつた」とかあたり前のように言っていますが、このシステムはじゃあ一体誰のためにあるのでしょうか。このシステムのルールに乗ると、第三世界と呼ばれる国々のお金の価値は先進国と呼ばれる国々のお金に比べて非常識なくらい価値が低くなります。

こういうことを言うと、なかには「いや、でもタイは食べ物が安いじゃないですか」「生活するのにそんなにお金がかからないでしょう。でも日本は物価が高いから、多くお金が必要だ」と言う人もいます。つまり、貨幣の価値はその国の実情にあつてると信じたのです。確かにタイの物価は日本に比べて低いです。でもタイに5年間暮らしてみた僕の感覚のなかでは十分の一という差はありません。非常に質素な生活をするならば、五分の一ぐらいの生活費で大丈夫でしょうが、都市生活をするならば、せいぜい二～三分の1

くらいでしょう。タイでは米や野菜など生活用品はかなり安いのですが、テレビ、冷蔵庫などの電気製品や、車などの輸入品は反対に日本より高いのです。これらのもの全て平均して考えても、日本のお金の価値はタイのお金より十倍の価値があることの理由には到底なりえないのです。この不公平さは、もっと意図的であるといえます。

このように説明してもなかなか、納得しない人たちが僕の友人たちにもいます。それは自分のこととして実感できないからでしょう。そこで、このシステムを実感するために。たとえば日本の都道府県の単位を国々と考えて見てみましょう。

もし長野県がタイだったら・・・

今回の講座に参加されている皆さんのなかに長野県から着ておられる方がいますので、ここで、長野県をタイと同じ立場に置いたらどうなるのか考えて見ましょう。

「長野県民の最低賃金は他の都道府県の十分の一とします。米などの基本食料やほうき、塵取りなどの基本生活用品の物価も十分の一にします。しかし、テレビ、冷蔵庫、車などは他の県と同じか、より高い価格になります。でも、贅沢品だから問題ないでしょう。次に長野県人は他の県に自由に出て行くことはできません。他の県に行くためには非常に難しい許可（ビザ）が必要になります。もし、許可なしにほかの都道府県に入国して仕事をしていると、不法就労と呼ばれ強制送還されます。一方、他の都道府県の人たちは自由に長野県に入ることができます。許可もほとんどの人にすぐに出ます。なぜなら、お金があり、不法就労するおそれがないとみなされるからです。お金（資本）はもっと自由に長野県にいつでも入れ、いつでも持ち出すことができます。そして、資本を持ち込んだ人は工場や店を作って長野県の人たちを十分の一の賃金で雇うことができます。また、長野県の環境基準は他の都道府県に比べ、非常に低く、工場の廃液なども垂れ流しが許されます。したがって、他の都道府県の企業家は非常に低いコストで工場などを作り、そこで安く生産されたものは他の都道府県に持って行き、売り、儲けることができます。」

このようなことを実際に長野県でされたら、長野県の人は何と言うのでしょうか。この状況を想像できるでしょうか。つまり、他の都道府県は、長野県の安い労働力と、低い環境基準を利用して、非常に安い生産費で出来た製品を持ち帰り、売ることによって多大な儲けを得ることができるのです。このような法律ができ、日本政府によって強制されたら長野県の人はそのことを許すでしょうか。—（受講生）「一時的にはそこで働く場所が得られたような格好になるから、喜ぶような雰囲気もあつたりするけれども、結果的には・・・」。—僕は福島県に住んでいますけれども、もし、福島県に強制されたら、直ちに暴動がおきると思います。これはどう考えても、あまりに不公平なことだからです。これはどの都道府県に当てはめられても、その当事者になったと想像するならば、絶対に受け入れることが

できないでしょう。でも、いま長野県を例に出した、それと同じことか、それ以上にひどいことを僕らはタイ、中国、マレーシアなどの発展途上国と呼ばれる国々に対してしているのです。

なぜそれは問題にならないのでしょうか。それは、単に、日本国内で起こらず、日本の外で起こっていることだからでしょうか？同じ日本人にしているのではなく、他の国の人々にしているからでしょうか？そして、それを可能ならしめている経済システムが公平だからと信じているからでしょうか？

「先進国」が主張する平等とは

この例は一つの実態を自分の身近なところに当てはめて想像力を働かせただけです。このように見たとき、世界経済システムの一つである貨幣価値の基準、そして、「発展途上国」と呼ばれる国から「先進国」と自任する国への人の流れは非常に厳しく規制されているのに、その逆はほとんど規制されてない状況が不自然であり、不公平であるということが見えてくるのです。

人はどんな悪人でも自分のやっていることは「正しい」と思いたいものです。僕ら日本が属する「先進国」が出資して作っている IMF（国際通貨基金）によって支えられている世界の国々の貨幣価値を決めるシステムは、同じ人間のする労働の価値をタイでは日本の十分の1、中国では二十分の1とします。この決め方が、全ての国に平等であり「公平性」が保たれていると主張しています。その基本的考え方は、「お金」は売り買いする商品の一つだということです。だから経済がいい国の「お金」は価値が上がって、経済が悪いところのお金は価値が下がるといいます。つまり、平等な競争のもとに公平性が保たれているといえます。これだけを聞けば、確かに「平等な競争」のように思いがちです。でも、この平等な競争というものの本質は何でしょうか。

ここでも、一つ想像力を働かせて見ましょう。ここでいう「平等な競争」は例えるならば「全ての人に対して完全に平等な百メートル競争をしましょう」ということと同じではないでしょうか。つまり、一歳児から九十九歳までの人をみんな同じ列に並べて、ヨーイ、ドンで走って、勝った人間がそこに在るものを全て取ってしまっているという競争です。これはある意味で完全に平等な競争です。競争の条件を規制するものが何もないからです。しかし、これを公平な競争と呼ぶことができる人がいるのでしょうか。体力がある20歳の若者と、よちよち歩きの2歳の赤ん坊が競争をしたならば、その勝負は火を見るよりも明らかです。したがって、そのような競争を実際にするならば、それは非常識と呼ばれるでしょう。2歳児と20歳の人にあるのは明らかな体力の差です。「先進国」と「発展途上国」の間にあるのも、明らかな富の蓄積量の違い、つまり、経済力の差です。しかも、この差は、第二次世界大戦まで、先進国と自任する国々が、発展途上国と呼ばれる国々を植民地にし、一方的に資源の収奪、人的搾取をおこなって、富を集積したものです。イギリスの産業革命に始まる「先進国」の歩みは軍事力という暴力によって公然と世界を支

配してきた歩みでもあったのです。その意味で、元から公平性というものが存在しない状況で始まっているのです。そして、その経済力の差ゆえに、同じ労働力に十倍以上の価値の差をつける貨幣の市場化、変動相場によって「発展途上国」の富はより少ない評価が下されているのです。これを不公平な扱いといわなければ、何をして不公平と呼ぶのか、僕は知りません。

このように「先進国」と「発展途上国」が作られた歴史の事実に照らし合わせてみるならば、なぜ、現在の世界経済システム、自由貿易体制は、「先進国」の都合に合わせて作られているのかという明確な理由が見えてきます。「先進国」は一度得た特権を手放さないために様々な方策をめぐらしているということです。その方策として現れているのが、貨幣価値を決める基準である変動相場制であり、自由貿易の国際ルール決める WTO など、経済のグローバルイゼーションを推し進める国際機関なのです。そして、そのシステムを作り、恩恵を受けていると思っている「先進国」の人々はそれを公平だと信じたいのです。

ここ十数年、日本の工場が「生き残る」ために中国やタイなどへ工場を移転することが多くなっています。中国では人件費が日本の二十分の一、原材料も十分の一、そして、工場を作るときに日本のような環境規制がほとんどありません。それらは企業にとって非常に有利な条件です。中国で生産をすると生産費が日本とは比べ物にならないくらいに安くなります。安い生産費でできた製品を、日本の基準からいうと少し安い値段で売りますが、生産費が占める割合が少ないですから、多大な利益が出ます。利潤追求を第一目的にする企業としては中国などへの工場移転をすることが「正当な企業努力」の一環となるわけです。それは同時に、工場が海外移転されてしまった日本の各地域に多くの失業者を生み出します。このような実態が見えてくるに伴って、日本やアメリカ、ヨーロッパの国々いわゆる「先進国」の企業が競争に勝って生き残ってゆく、というより、他の会社を蹴落として市場を独占しようとするためには、現在の世界経済システムによって、常に安い労働力と安い資源、低い環境基準を与えてくれる発展途上国と呼ばれる国々が「先進国」にとって必要なのです。それがなくなったら、日本やアメリカ、ヨーロッパの「先進国」で、今の物質水準とか経済水準を保つことはできません。

政府による海外援助の本音

このことが分かってきますと、現在の「先進国」が行っている海外援助がどのような意図の下にされているのかということが、よく見えてきます。政府援助というのは表向き「人道的援助」をうたっています。「発展途上国」の人々は貧しくて苦しい生活をしているので、それらの人々を助けるために援助するというわけです。しかし、「暗黙の了解」として常識化されていることは、日本政府であれば、「日本のお金であるのだから、日本のためになる援助をする」ということです。本音として、安い労働力と、安い資源、そして、低い環境基準を与えてくれる「発展途上国」は政情が安定してほしいのです。そのために

は「独裁政権」であろうと、「先進国」のためになるのであれば援助をします。民衆によって選ばれたアンサー・スチー女史を軟禁して、政治活動の自由を奪い国際的に非難を浴びている軍事政権国ミャンマー（ビルマ）に政府援助をしているのは日本です。世界から批判を浴びていますが、それでも日本は援助を止めません。そこに利権があるからです。

また、「先進国」が望んでいる自由貿易のシステムを世界共通のルールとして「発展途上国」に受け入れてもらうようにするためにも、援助は使われています。WTOなどに加盟する国としない国に対しての援助の差は歴然としています。また、一昔前であれば、資本主義国である「先進国」を脅かす社会主義や共産主義が人々の間に広がらないように、援助によって懐柔政策も行われました。「先進国」の意向に沿わない国々からは援助が引き上げられるということも当然のように行われています。革命によって、アメリカにたてついたキューバは「先進国」からの援助を一切断たれました。ベトナムもつい最近まで「先進国」からの援助は一切ありませんでした。東西の壁が壊れ、ソ連が崩壊した後、ヨーロッパの「先進国」の援助は軒並み東ヨーロッパの「発展途上国」に流れてゆきました。このように援助の流れを良く見てゆくと、そこに明らかな意図と傾向があるのは自明のことです。

農業の技術援助の実態

タイでは60年代、「先進国」農業援助である「緑の革命」を受け入れました。それはそれまでの自給自足的な農業を切り捨て、商品作物の単一大規模栽培を基本とするいわゆる近代農業の普及という内容です。それによって、タイにおける輸出作物の生産増をもたらし、外貨を獲得でき、タイの工業発展に寄与したといわれます。しかし、農村では、農地開拓による大規模森林破壊、水資源の枯渇、単作、化学肥料使用による土壌流出、地力劣下、病虫害の多発による収量低下、農薬による環境汚染と農民の健康問題と、深刻な問題を引き起こしています。また、種子、肥料、機械、灌漑といった農業資材、設備を全て購入しなければならないという近代農業は農民に多額の借金を負わせることになりました。現在、タイの農業問題といえば、第一に農民の借金問題です。「緑の革命」が起こる前のタイの農村は借金問題ということばかりありませんでした。借金で生活苦に国あえいでいるタイの農民から、森に囲まれて、豊かな生活をしていた60年代ころまでの話を聞く時、「先進国」主導による独りよがりの援助の実態が見えてきます。

以下の文章は、僕が日本国際ボランティアセンターというNGOのタイプロジェクトの責任者であった98年に、タイプロジェクトの年間計画の前文として書いた文章です。

『97年のタイのパーツ危機をきっかけに一気に広がった経済危機は多くの失業者を出し、今後、まだまだ増えると予想されている。そのなかで、最初に切られているのは失業保険もない日雇い層の人々であり、その多くが農村に帰っている。政府も農村のもつ危機

緩衝的な機能を重視し農村開発に力を入れることを明言している。しかし、その方向は依然として、輸出作物生産拡大による外貨の獲得と経済発展である。

そのなかで、今進められようとしていることは「第二の緑の革命」とも呼ばれる、バイオテクノロジーの農業生産技術への導入である。特に、遺伝子操作によって特定の除草剤に強い品種を作ったり、作物体内にある毒素を作る遺伝子を加えることにより、害虫を殺せる作物を作ることなどによって生産性を飛躍的に上げることを目指す技術の開発と普及である。この技術によってできる作物の人体、環境への安全性はまだ確認が取れていないにも関わらず、問題が科学的に証明されていないという論理で、米国、多国籍企業などが精力的に普及推進をしている。そして、その影響は着実にタイにやって来ている。最近、政府はバイオテクノロジー推進のために巨額の研究費を投入することを決定したという。

この技術のタイプと普及の経緯を見ると、あまりにも「緑の革命」が導入された状況に似ていることに驚く。

- 1) 新しい技術は外からやって来る。その技術はそれまでの地縁技術を一考だにしないだけでなく、農民の智慧を無視する。
- 2) その新しい技術は生産性が飛躍的に向上し、なんの問題がないという「バラ色の夢」だけを科学的という装いを持って語る
- 3) その新しい技術普及によって儲かる多国籍企業などが政府、民間を動かし、南の国での普及のための援助を促す。

ここに現れていることは、大量生産、消費による経済的活性化が人々の幸せにつながるという幻想と、そのためには、科学の力によって自然をコントロールし必要なら破壊することも「大多数の幸福」のためにしかたないとする思想である。数多くの価値判断の基準がある中で現代社会は「経済的」と「科学的」という二つに、絶対的な「神」に近い価値を与えており、善悪の判断はこの二つに委ねられているのである。

WTOや現在問題になっているMAIなどの流れを見ると、この潮流は押しとどめようもないくらいに、強いものがあり、タイなどにも今後ますます浸透して来るであろうということが予想される。』

「国際秩序」＝「貧富の差の固定化」

「海外協力」という美名の下に行われている政府や国際機関の援助というものを見ると、そこに明らかな意図を見ることができます

その一つは現在の国際秩序を保つことです。国際秩序の安定という和良好的印象を受けるかもしれませんが、その意味は、豊かな「先進国」と貧しい「発展途上国」の関係、つまり「貧富の差」を生み続ける構造を維持することです。先ほど話した世界の通貨価値を決める変動相場制というルールは「貧富の差」を生み続ける構造の一事例です。この不公正な秩序構造の維持、固定化によって発生する、「発展途上国」の安い労働力、安い資源、安い食糧、低い環境基準というものが、日本やアメリカ、ヨーロッパの先進工業国に金銭

的、物質的繁栄を与えているのです。したがって、その恩恵を受けている「先進国」はそれを守ることが最優先事項になります。しかし、それは、「貧しい国と人々は国際秩序を安定させるために貧しいままであるべき」ということに他なりません。

「近代化の促進」という独善

二つ目に、「近代化」という思想と社会形態の普及です。海外協力に限らず、全ての活動は、そのことが「より多くの人間の幸福」のためになるという考えが根底にあります。

「先進国」の協力援助の思想は「近代化によってより多くの人々が幸福になるはず」という大前提があります。この「近代化」という思想はヨーロッパで生れ、「産業革命」「植民地主義」「資本主義」を生んできた基本的思想です。具体的には、より多く、より早く、より便利、より効率的であるということが善であり、それらは競争原理によって「進歩」という考えです。そして「進歩」が「幸福」の条件とする考え方です。現代において、それらを実現するために必要な考え方の尺度が「経済効率性」です。全ての事の良し悪しの判断はこの尺度で測られ決定されます。

このような尺度で測られるとき、伝統的な文化や生活習慣、そして自給をベースとしている伝統的農業などは遅れたものとして、当然のように切り捨てられます。また、経済的効率を最優先とする近代化した産業が引き起こす環境汚染も、公共の福利のために起こってしまった「公害」として扱われるのです。この「近代化」を絶対善とする思想は、「先進国」の援助協力によって引き起こされる環境破壊、多様な伝統的文化の崩壊という問題を、「発展・進歩」のために必要な犠牲と考えます。しかし、起こる問題の犠牲者は常に社会の底辺層に置かれている貧しい農民、労働者、スラムの住民です。政府・国際機関の援助協力事業によって、貧しい人々が強制的に立ち退きを迫られたり、劣悪な環境での労働、生活を強いられたりするということは「発展途上国」で日常茶飯事に起こっていることです。「貧しい人々の為に」という人道的援助協力を掲げながら、実際は貧しい人々をより貧しくするということをしているのが現実です。

政府や国際機関を通してする海外協力は、する人の善意があるなしに関係なく、この2つの意図に沿って働くことになります。そして、結果的に「貧富の差」を広げ、環境破壊を推し進めてしまうという根源的な構造を持っているのです。

NGOの存在意義と限界

では、政府や国際機関ではなくてNGO（民間組織）を通してする海外協力や援助はどうでしょうか。政府・国際機関に対抗する形で出てきたNGO（民間組織）は初めから、政府・国際機関ができないこと、問題を起こしていることを解決するという目的を持って生まれました。NGOが出てきた30年ほど前は「援助協力というものが必要な人々に届いていない」ということと、「援助協力が貧富の格差をかえって広げている」ということが批判されていました。また、援助協力に関わる政府役人の汚職もかなり問題になっていました。そん

な訳で、ほとんどの NGO が力を入れたことは「援助を必要な人々のところに届ける」ということと、「公平な分配をする」ということでした。この点に関しては NGO に関わる人々の意識は非常に高く、汚職を生むことが非常に少ない組織であるといえます。

又、政府の方針が貧しい人々をより貧しくしているということを指摘する問題提起型の NGO も数多くでき、様々な問題が明るみに出され、政府・国際機関にその方針を変えさせるという成果も徐々に上がってきています。海外協力の現場では現在、地域の住民の意向を反映させる「参加型」のプロジェクトというのが主流になってきています。これなども、20年前ほどには一部の NGO でしか真剣に考えられなかったことですが、今では政府・国際機関も言葉としては取り入れるようになって来ました。このようにみえてくると NGO の活動は政府・国際機関のそれまでの活動のあり方に疑問を投げかけ、改善を迫るという役割と存在意味があるといえます。

しかし、政府・国際機関の隠れた意図である「貧富の差の固定化」と「近代化の推進」にたいする根源的見直しと解決策の提言ということに関しては殆どの NGO が無力であるといわざるを得ません。というのも、そのことを真剣に問うことは NGO が存在できる基盤を失うことにつながるという根源的なジレンマを背負っているからです。

NGO と「貧富の差の固定化」

「貧富の差の固定化」の問題に取り組み、努力している数少ない NGO は当然のごとく「先進国」の在り方、政策などを批判します。したがって、このような活動を真剣にする NGO には「先進国」の政府援助はなく、企業などの献金も殆どなく、常に慢性的な活動資金不足に悩まされています。また、このような問題に目覚めて、積極的な活動を始めると、「先進国」の資金援助団体から資金援助を打ち切られるということもよくあります。「発展途上国」の NGO で常勤している活動家たちはそれによって生活の糧を得ている人も多くありますので、活動資金が打ち切られるということは即、生活苦ということになります。

タイのある友人夫婦は、以前 NGO で働いていたのですが、辞めて農村に入り農業で生計を立てるということを始めました。というのも、NGO で働いていたとき、援助団体の意向によって突然資金を切られたり、援助団体の意向に沿ったプロジェクトをするように圧力を受けたりしたこともあり、疑問を感じていたからでした。また、自分たちが進めている自然農業や相互扶助の住民グループの組織というものが本当に人々のためになるのか自分たちで経験してみたくなかったからといいます。村に入って10年、さまざまな苦勞をしてきましたが、今では村の中で最も信頼されるリーダーであり、様々な活動を村の人々と一緒に行っています。でも、このような元 NGO のスタッフは非常に例外的です

日本など「先進国」の NGO の場合は、関わる人々のボランティア精神とその活動に共感する人々の寄付によって活動資金を得て始まります。年と共に活動が広がり、専従スタッフとして関わる人が増えてくると活動資金もかなり必要になり、個人献金から、大口の

寄付団体、企業、政府の補助金というものに活動資金源が移ってきます。しかし、この大口の資金源になる組織というものは、同時に「先進国」の経済的優位性を作り出している組織です。したがって、この資金源に依存を深めてきますと、この組織の作り出したお金や時間があるために NGO が存在できるということになってきます。この現実と「先進国」の横暴、不公正さを指摘する活動のギャップは NGO で真剣に活動する人たちを悩ませます。

また、取り組む問題が根源的であるために「学校をいくつ建てた」「井戸を何基掘った」みたいに「成果」が簡単に見える形で現れることはありません。ですから普通の人々はそのような活動にあまり関心を持たず、多くの賛同者を得ることも難しいものがあります。活動内容が「批判・非難」というものが多くなるために、長い間活動をしていると悲観的、厭世的思いにとらわれやすくなって挫折感を持って NGO を去る人々もたくさんいます。

どんな活動でも自分の存在基盤を否定するとき活力を失います。「正義感」「義務感」だけでは続けられません。その意味で、経済的に優位な「先進国」にいることによって、存在基盤をあたえられている NGO が「貧富の格差の固定化」という問題を根源的に問うことは構造的に無理といえるほど難しいことなのです。

NGO と「近代化の推進」

もう一つの「近代化の推進」ということに関して具体的に批判的であることは、より難しいことです。ほんの一部の NGO を除いて、殆どの NGO の人々は「近代化」が「幸福」につながると漠然と信じています。特に「先進国」の NGO にその傾向は強いものがあります。物はないより有ったほうが良いと思ひ、不便より便利なほうが良いと思ひ、効率はいいほうが良いと思ひています。当然、「発展途上国」と呼ばれる国々の人々もそう信じていると疑いません。したがって、援助協力というものは必然的に「先進国」の物質的生活レベルを模範とします。「途上国」のそれは「先進国」のレベルに近づけば「発展」したと考えます。そして、そのためにお金や物、技術を援助し「発展」を手伝います。これが「海外協力」であり、いいことだと思ひているのです。そのことによって、「発展途上国」の人々の「幸福」の為に手伝えることができると思ひます。

いったい「幸福」とは何でしょうか。世界第二の豊かな国になり、便利で物もあふれている日本は、「近代化」ということに関しては優等生です。この模範的な国で、16分に1人、年間3万人以上の人々が自殺をします。自殺をする人は自分が幸福とは思ひません。不幸で、どうしようもないと思ひから自ら命を絶つわけです。その意味で、自殺者が増えるということはそれだけその社会の不幸度が増しているといえるでしょう。十数年前、自殺者は年間1万人ほどで、交通事故死とほぼ同じでした。この数字でさえ多いといわれたのですが、物質的にも、便利さにおいても、効率性においても格段に「進歩」した現在、自殺者は3倍以上になっているのです。ということは、ある意味で、日本の社会の不幸度は3倍以上になっているといえるでしょう。このような国のあり方が「発展途上国」の模範となれるのでしょうか。

ところが、そのような自分たちの国の社会や生活の在り方を深く問うことなく、お金、物、が増えれば、便利になれば、人々が幸福になるのだと思っている人が、非常に多いのです。このような人々が、NGOで「途上国」の村などに行き、プロジェクトをすると、村に波紋を投じます。まず、村人の中にそのプロジェクトに関われる人々と、関われない人々、という「分裂」を引き起こします。関わられた人々の中でも、そのプロジェクトからお金とか物の援助を得ることができる人々と、得ることができない人々という「分裂」を作り出します。この「分裂」が村人内の関係に嫉妬、猜疑、疑心というものを作り出します。お金や物の援助が多ければ多いほど大きくなります。分裂が大きくなると村人内で援助をめぐる争いが起こります。反対に、お金、物の援助が十分であると、今度は村人の援助する団体への依存心が高まります。そして、多くのプロジェクトは3～5年単位ですが、終わってNGOが去った後には、村人内における分裂しいがみ合う関係とか、常に外からの援助を求める依存心を作ってしまうのです。このプロジェクトの後に残された分裂と依存心は村人にとって不幸の元です。

「近代化」に対し根源的な疑問を持たないNGOは、結果的に、このような問題を海外協力という活動を通して作っているのです。これはどんな善意から出たとしても、自分たちの価値観の押し付けであり、多様な生活スタイルや考え方を尊重しない行為であり、自分たちの行動による波紋に気づかない、独善的行為です。そして、その独善性に気づかずに、無意識に「近代化」を推進しているNGOが非常に多いのです。

海外協力と幸福観

「人にとって「幸せとは何か」という問いは古今東西、常に問われてきたことです。そして今でも問われ続けているものです。もし、本当の意味での協力というものがあるとするならば、それは「相手の幸福の為に手伝いすること」であり、同時に自分も幸せになることでしょう。その為には、相手の幸せとは何か、洞察できなければなりません。しかし、冷静に考えてみるならば、自分ではない他人の幸せを洞察できる人がいるのでしょうか。よく考えてみると、自分自身の幸せさえ分からない人が殆どです。このことを少し深く考えると、「幸せ」というものの感じ方は時、場所、場面、関係によって、どんどん変わってしまうということに気づくようになります。あるとき幸せに思えたことが今は思えないとか、ある物で幸せと感じたのに今は不満に思うとか、ある環境で良いと思えたことが、違う環境では全く反対に思えるなど、全ては常に変わる無常の世界です。そして、自分の外にある環境や物や他の人が「絶対的な幸福」を与えてくれることはないのだということを知るようになります。

このことを知ることはある意味で、従来の考え方で「海外協力」をすることの意義を否定することであり、消失することです。しかし、同時に、様々な国の多様な考え方をもった人々と関係の在り方、協力の在り方を探ってゆく出発点になるのです。

海外協力から共同体へ

なぜ、海外協力の仕事を辞めて日本で生きること、それも新しい共同体のあり方を求めるのか、という質問に答える中で、かなり長く、現在の海外協力のあり方への厳しい批判をすることになりました。この中でもう一度、繰り返したいことは、「貧しい国々」が存在するということは「豊か過ぎる国々」が存在するからです。「豊か過ぎる国々」とはアメリカ、日本など「先進国」と自任している国々です。これらの国々は現在の社会、経済システムを自分たちに都合の良いように操作する力、つまり、経済力と軍事力を持っており、その力で「発展途上国」をそのままの貧しい状態にしておいて、「先進国」が豊かさを享受できるというシステムを作っています。でも、このことは「自由貿易体制」とか、「国際秩序」といった言葉に代表されるように、少し聞いただけでは正しい、常識のような響きを持っています。これは「先進国」だけに通用する「常識」が作られ、教育、マスメディアを通して、周知の徹底が行われているからです。そして、このシステムをそのままにして、海外協力をするということは、そのシステムを守るために使われてしまうということです。その意味で、この事実気づき、海外協力が無意識に進めている「近代化＝進歩＝幸福」という幻想を見破り、そうでない「もう一つの在り方」を意識的に目指す活動でない限り、いわゆる海外協力は助けることではなく、蹴落とすことに加担することになります。そして、そのような活動はないほう良いのです。

僕自身、バングラデシュでの6年間、タイでの5年間、そして日本にいて NGO のアドバイザーとして海外協力に関わっていたときは、常に、海外協力の落とし穴に陥らないよう、在るべき協力のあり方を考えてきたつもりでした。しかし、最後の活動地であるタイでの自然農業トレーニングセンター作りが4年目を迎え、当初立てていた目的が予定どおり達成される見込みがついてきた時、タイの後は、海外協力の仕事を辞め、日本に帰って農村で新しい共同体の在り方を目指して生きて行きたいと思うようになってきました。

初めてインドを訪ねてから、今までの20年間、多くの事々を通して気づかされ、学ばされてきたことを、真剣に自分の人生を掛けてする場合は、僕にとって「発展途上国」ではなく、日本であると感じたからです。それは2つの意味においてです。一つは「発展途上国」を貧しい不利な状態にしている原因である「先進国」日本が変わらなければ、「発展途上国」の問題も解決されないということです。そして、二つ目は「発展途上国」を搾取して物質的には豊かになっているのに、満足がなく、常に「不安」の中に必死に生きている日本人の精神的な貧困が根源的な問題であると感じたからでした。

病める現代社会

「先進国」である日本は世界に冠たる経済大国であり、「発展途上国」の人々からはジパング（黄金の国）とみられ、できれば日本に行って一攫千金をつかみ「幸福」になりたいと思う人々がたくさんいます。彼らから見ると日本では全ての物が十分に有り、便利で、進んでいて、全ての人が幸福に暮らしているように見えるのです。ところが、実態は年

間3万人を超す自殺が示しているように「社会的不安」にさいなまされている国です。日本よりもっと「進んでいる」アメリカにはSuicide by cops（警官による自殺）という言葉があります。精神的に病んで自殺をしたくなかった人が、自分で自殺をする勇気がないので、街の通りなどで無差別銃撃などを行い、駆けつけた警察に射殺されるという社会現象のことをこう呼んでいます。アメリカでも以前はこのような言葉はなかったのですが、今では当たり前のように使われています。病めるアメリカを象徴している言葉です。そして、アメリカを模範として追っている日本にも「17歳の理由なき殺人」や無差別通り魔的殺人が社会現象化しています。

このような社会において、日本の人々は皆、自分たちの生き残りに必死で、他の人のことを考えている余裕もないといえます。政府は「痛みある構造改革」というスローガンの下に競争原理を徹底させ、勝ち残り組み作りに必死です。しかし、勝ち残り組みと見られている人々も、いつ負け組みに落ちてしまうのかという「不安」に悩まされ安心がありません。負け組みは、文字通り、明日どうやって生き残るのかと日々の生活の「不安」に駆られています。そして、勝ち残り組みはそれを維持するために、負け組みは勝ち組になるために、「不安」を原動力として、ゴールのない戦いをしているようにみえます。

ビル・ゲイツが模範とされる現代社会のモラル（倫理）

現代社会で「勝ち組」の代表的な人といえば、アメリカのマイクロソフトの創始者ビル・ゲイツが有名です。50歳にもならない彼は3兆円もの資産を一代で築いたといわれています。アメリカンドリームの実現者です。日本の経済界も政治界もビル・ゲイツを社会の手本にするようにとばかりに彼を持ち上げます。つまり現代社会はビル・ゲイツのように、経済的に成功し、多くの資産を手中にした人々を模範生とするモラル（倫理）を持っている社会です。このモラルとはどのようなものでしょうか。少し、具体的に考えてみたいと思います。3兆円の資産というともう一般人には想像もつかない世界なので、それを、もっと具体的にみてみましょう。

3千万円の資産を持っている人々が10万人いる都市があったとします。そこで、ビル・ゲイツがビジネスによって、3兆円の資産を貯めたとすると、残りの99,999人の人々は資産が0円になり、生活できないということになります。幸いなことにビル・ゲイツは全世界60億の人間を相手にビジネスをしていますので、問題ないように思われていますが、3千万円の資産10万人分が彼の資産です。有り余ることを越えて、持っていることが負担になるほどのお金、物を持って、ビル・ゲイツは満足しません。もともと儲けるために、アメリカ政府に独占禁止法に触れると警告されながらも、「不安」材料である、競争相手会社を蹴落とし、より多くの資産を貯めるために日夜仕事に励んでいるのです。いったいこれ以上のお金を貯めて、どうするのでしょうか。しかし、現代社会は、有り余るほどあっても満足できずに、より多くの金を、他の人を蹴落として自分のものとするビル・ゲイツのような人々が素晴らしく、成功者といわれるのです。

競争社会の模範であるアメリカでは人口の1%しかいない大金持ちの資産総額が、残り99%の人々が持っている資産総額より多いといいます。人間社会とは競争社会であり、生き残るためには他者を蹴落としてもいいということが常識になっている社会。多くの人々を蹴落として自分だけが有り余るほどの資産を得れば、成功者といわれる社会。蹴落とされ、貧しい生活を強いられている人々を負け組みだといって切り捨てる社会。自然を限られた人間たちの利益だけの為に利用できるものとして扱い、環境破壊、汚染を引き起こして省みないどころか、環境ビジネスという新しい分野のビジネスができたと喜ぶ社会。お金と力（暴力）のある国が、力のない国々、人々を一方的なルールによって搾取し、富める者はより富み、貧しいものはより貧しくなることを仕方ないことと黙認する社会。富める者は富によって満足せず、いつその場から落ちてしまうのだろうかという「不安」に駆られ、貧しい者は生きるのに最低限必要な食べ物さえに事欠く日々の不安の中に暮らすことを余儀なくされる社会。現代社会とはこのようなものです。このような社会はそこに住む人々に幸福をもたらすのでしょうか。

崩壊に向かう現代社会

このようなモラルをもつ社会はやがて滅ぶべくして滅びるのだらうと思います。競争社会の敗者であり、虐げられている人々の不安と怒りがやがて、それを強いている人々に向けられるときがきます。世界貿易センターの9・11事件はこの社会が作った歪みが、少し極端に現れた例に過ぎないのです。「発展途上国」と呼ばれる国々においては、あのような事件をいくらかでも起こすほどの怒りが現代の経済、社会システムによって日々作られているのです。「テロリズム」の不安が最大の問題とあって、アメリカを先頭に「テロリズムとの戦争」を掲げています。しかし、アメリカが勝てば勝ほどに、押さえ込めば押さえ込むほどに、より大規模なテロが起こるエネルギーを溜め込むことになります。この戦争に勝者はいません、在るのは敗者だけです。

年々、すさまじい勢いで消えてゆく森林。タイではこの30年で国土の80%を覆っていた森林が20%以下になっています。森林とは地球を覆う皮膚であり、自然の環境を調整し、生物が生きられるように、守っている生命の要です。その要は今地球上からなくなろうとしています。調整機能を失えば地球において異常気象が頻発するのは当然です。自然を収奪することだけに狂奔する近代農業は、年々、四国の面積と同じ農地を砂漠化しています。工業と近代農業による環境汚染は全世界に広がり、人間が安心して吸える空気、飲める水、そして、食べ物は希少価値にさえなっています。そして、遺伝子組み換えによる生命の操作が一握りの人間の「利益」のために本格化しようとしています。

このような本末転倒のモラルを持つ社会は、やがて、確実に人間自身が滅びるか、地球を人間の住めない所にしてしまうでしょう。そして、現在の社会は間違いなくその方向にひた走りしています。このままで行くならば滅びは回避できないだらうと思います。僕ら

が生きている間は何とか持つかもしれませんが。しかし、僕らの子供、孫の時代は絶望的だと思います。

崩壊への道からから転換へ

この滅びに向かって突進してゆく現代社会の暴走を止め、人類が地球上で生きてゆくためには、方向の転換がどうしても必要になります。その転換に向かう第一歩が「気づく」ということだと思います。競争原理によって文明が進歩し人々が幸福になるということは原理的にも、実際的にもありえなかったということに気づくことです。競争は勝者にも敗者にも「不幸」しかもたらさないという理に気づくことです。そして、「競争」から「共生」へ、「奪い合い」から「分かち合い」へ、「蹴落とし合い」から「支え合い」へという生き方への転換がどうしても必要であるということに気づくことです。そして、真に気づいたとき、新しい方向への歩みがすでに始まっています。

新しい共同体を目指すと言うことは、一言で言えば、「競争」から「共生」への具体的方法を探ってゆく歩みをするということです。共同体と言うと大きくは「人類共同体」から小さくは「家族共同体」まであり、その在り様も千差万別です。ここで僕がイメージしているのは、家族共同体より少し大きく、いくつかの家族が共同することにより共に生きてゆける規模のことを考えています。

人間はこの地球上に体を持って生きています。体はこれを養う食物、着る物、住む場所を必要とします。これらがないと基本的「不安」に駆られます。現代社会はこれら全てを、お金によって得るのだといいます。したがって、いい暮らしをする為には、いかにして給料条件の良い仕事につくかということが最大の関心事になります。そして、頑張ってお金をもうけることがより良い生活につながると信じています。このお金第一の社会システムで生きてゆくためには、結果として「発展途上国」を搾取することになります。

この共同体はまず、「発展途上国」の人々をこれ以上搾取しない生き方を目指したいと思います。その為には現在の経済システムに依存しない新しい生き方が必要になります。それは生活に必要なものをなるべく自給するという生き方から始まると思います。そして、それは必然的に農村になります。経済第一の社会で、お金が儲からない職業である農業は農山間地でどんどん見捨てられていっています。この農山間地で、人々が幸せに暮らせる新しい共同体の在り方を見出せば、それは同時に、日本も「発展途上国」も地球も救える一つの生き方になると思うのです。

新しい共同体の目指すもの

新しい共同体が目指すことは共生の在り方を深めることです。その為に次の4つのことを学び深める場としての共同体でありたいと思います。

第一に「自然を収奪しない農の在りよう」を学ぶことです。人間は自然の恩恵なしに生

きることはできない存在です。しかし、人間は自然を自分たちの利益のために収奪し続けてきました。自然を収奪せず、自然と共生する農のあり方、生き方を学ぶことです。

第二は「人を搾取しない生の在りよう」を学ぶことです。競争原理は結果的に他の人を搾取します。そして、現在の経済システムはそのベースの上に作られています。その経済システムにのらない「分かち合え、支えあう」生き方を学ぶことです。

第三に「他に依存しない内面ありよう」を学ぶことです。人が集まるとき必ず人間関係に問題が出ます。その問題は基本的に「他人のせいにする」ということが原因であると思います。全ての問題は自分が作ったものであり、同時に、自分が学ぶチャンスであるという真実を自己の内面を深めることによって学ぶことです。

第四は「真の意味での海外の人々との協力のあり方」を学ぶことです。他の国の人々と交わるということは新しい価値観、文化、人々に出会うことです。しかし、現在の海外協力のシステムは多様な価値観を否定し、近代化という非常に貧しい価値観押し付けようとしています。真の意味での豊かさをもつ人々、価値観、文化に出会える海外の人々との協力関係を築き深めてゆくことです。

以上、簡単に今後、深めてゆきたい課題を目指すものとして挙げさせていただきました。現在、福島県の飯舘村という地でささやかな試みを始めたばかりです。この共生への道のりは、シンプルで本当は簡単なのだと思います。しかし、現代社会のモラルと価値観の洗礼を受けている僕たちにとって、道のりは遠く険しいだろうと思います。全ての問題を学びの時と捉え、その時、その時学ばされることを通して共生の在り方を深めて行ければと思っています。